
夢見る子犬

apathetic

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る子犬

【Zコード】

N1050BA

【作者名】

apathetic

【あらすじ】

最強を夢見る子犬フォルティ。あの人に憧れ、そしてあの人の死の謎を探るため、人間の世界へと入つて行くが・・・?しかし、成長していくにつれ、あの人の真実を知るにつれ、この世界の謎へと巻き込まれてゆく。処女作です。見苦しい表現等あるかもしれません、ご了承ください。今後に生かしたいと思いますので、感想評価等いただけたら嬉しいです。

人への一步

「着きましたよ。ここが、今日からあなたの家です。」

そういうて、こちらを見て微笑む若い女人。

流れるような金髪に、整つてゐる顔、背はすらつと高くそれでいて出るところは出でていて引っ込むところは引っ込んでいる美人だ。美しい金髪に若葉色のワンピースを着ていて、とっても似合つてゐる。本当に、何時もの訓練時とは大違ひだよなあと思つ。

そして、その女のひとの後ろには、立派な屋敷が建つてゐた。全体的に明るく、それでいて落ち着いた雰囲気を兼ね合わせている、何というかどつしりとしている家だ。それでも、ここに来るまでに見た屋敷なんかよりも質素な部類に入るのだけだ。

そして、その女性・・・アートルムは人が三人くらい横に手を広げて並んだくらいの大きさの玄関のベルを鳴らす。

チリリイイン、という澄んだ音が響いた。とてもきれいな音で、何度も鳴らしてみたい衝動に駆られた。駄目なんだろうけど・・・

しばらくすると、中から使用人の格好をした女性が出てきた。短髪で髪の色は茶髪、明るく人懐っこいような顔をしていた。両手をお腹の前に揃えて、かわいらしい笑顔を向けてくれる。

「アートルム様！お久しぶりでござります。」

どうやらアートルムは前にもここに来たことがあるようだ。この

歓待ぶりから見ると、とても良い関係を築いていたみたいだ。

「本当に久しぶりですね。Hミーはいるでしょうか？」

「はい！中へどうぞ、Hミーさまがお待ちです。」

そういうて、とても大きなドアを開いて中へ通してくれた。

僕は、これから始まる未知の体験、そして新しい関係にドキドキしながら屋敷の中に入った。

そのまま、客間へ通される。客間へ来るちょっととの間でも、派手すぎず、かといって地味すぎるということのないようない雰囲気の調度品が置かれていて、これだけでもこの屋敷の主はいい人そうだなあと思える。これから暮らす家だ。一緒に暮らす人がどんな人かはとっても気になる。

そうして、僕たちが案内されたのは客間だった。ここでもドアを開けてもらい、中に入る。

「アートルム！久しぶりね、元気だつた！？」

部屋に入った瞬間にそう言って僕たちを迎えたのは、二十歳を少し過ぎたくらいの女性だった。赤い髪の毛を肩の少し上あたりで切りそろえた、元気という言葉がぴったりと当てはまるような人で、活発そうな感じなのに品の良さを窺わせる不思議な雰囲気の女人だ。今日初めて会ったのに、なぜか昔から知っているかのような雰囲気をさせてくれる。つまり、とっても優しそうで親しみやすそうな人だ。

「ええ、久しぶりですねエミー。」

再開のあいさつを交わす一人。

「元気そうで安心したわ。それで、そちらの男の子……よね？
その子が例の……？」

そう、先ほどの今日からエミーに住むところはつまるところ此処
そう言つてこちらを見る。彼女の瞳は少し嬉しそうに輝いている。

そう言つて、息子になるところだ。
の家の

「その通りです。あなたこの子を引き取つてもういたいの。」

息子になるところだ。

「ほら、早く自己紹介をしなさい。」

そういうて、微笑むアートルム。その笑顔にどうにか緊張を落ち
着けると、意を決して言つた。

「はじめまして、エミリーさん。僕の名前はフォルティ、8歳で
す。これからよろしくお願ひします。」

そう言つて頭を下げる僕の姿は、小麦色の髪の毛は肩口で無造
作に後ろに流し、身長は平均よりは少し高いかと思われる程度で、
すつと通つた鼻筋に優しそうな瞳といった中世的な顔立ちをしてい
る。美少年とも、美少女とも言われそうな顔立ちだ。なにせ、一そ
うなるように頑張った『…………』のだから。そして、腕には金色と銀色の腕輪を身につけている。が、周りの者には

見えないようアートルムから魔法をかけてもらつてゐるので、エミリーには見えないはずだ。

「はじめまして、フォルティ。それでアートルム、これは夢じゃないわよね？本当にいいのね？」

そう言つた彼女は先ほどのせりあつした田をよつ一層開き、つづいていた。

「ええ。こちらからお願いしたくらいなのですから。ぜひあなた
の養子にしてあげてください。」

その言葉を聞き、キャーっと声を上げると僕に抱きついてきた。
少し、重い・・・。

「私の息子よーー！初めての子供ーー！しかもこんなにかわいい子なんてーーー四年間も待ったのよーーー！」

そう言つて嬉しそうにはしゃぐ彼女は到底母親には見えない。僕は彼女のオーバーなリアクションに驚きつつも頬が緩んでくるのが止まらなかつた。抱きついてきた彼女をじぢりからも抱きしめ、声を弾ませて言つた。

その言葉を聞いてさらにテンションが高くなるメアリー。その様子を微笑ましいものを見るような顔で見ていたアートルムは、

「その様子なら大丈夫なようですね。」

と、心配していたことが起こらなくてホッとしていた。それを見た僕は、お母さんにこう言った。

「うん！お母さんも美人だし、お家もきれいだし、文句なんか出るはずないよ！…ありがとう、アートルム。」

僕がそう言つと、僕の言葉を聞いたお母さんは少し頬を赤らめて、
「私からもお礼を言わせて…こんなにかわいい息子をありがとう
アートルム！」

そう言つてほほ笑む僕たちを見てアートルムは恥ずかしげに、喜んでくれてよかったですと言つてくれた。

人への一步（後書き）

感想評価等お待ちしております

光の中から現れる僕の姿は・・・（前書き）

今はストックがあるので投稿が早いですが、基本不定期更新です。

光の中から現れる僕の姿は・・・

僕がミッシェル家の一員となつた・・・つまり、僕の名前がフオルティ・ミッシェルになつた日の夕方。

街を照らしていた太陽があと少しで完全に沈むといつ時に、誰かが玄関を開ける音がした。

「ただいま。メアリー、今帰つたよ。」

そう言つて帰つてきたのは、成人して間もないと言つた感じの男の人で、盛りあがつてゐるという風でもなく、貧弱すぎるということもない引き締まつた筋肉に、すらつと伸びた背筋、目つきは柔らかく、なかなかの美形だつた。もしかして・・・と僕が思つてゐる

と、

「おかえり、あなた！」

そういうて、メアリーが抱きつくる。やはり、僕のお父さんとなる人のようだ。なかなかの美形だし、つよそうだなあなどと思つてみると、抱きつかれたハリスもメアリーを抱きしめ、キスの嵐を降らせる。完全に一人の世界に入つてしまい周りの人たちはいつものことなのか苦笑している。こう言つたことは初めての僕が茫然としているといふ、ようやく一人の世界から帰つていたハリスが、

「おお！――そこにはアートルムじゃないか！――久しぶりだな、元気だったか？」

そう言つて、アートルムとハグをする。アートルムも会えて嬉し

そうだ。

「ええ久しぶりねハリス。あなたも相変わらず元気そうですね」

りですね。」

そういうて、体を離す。

「それで、そっちにいる男の子はもしかして……」

といいながら、ハリスはメアリーとアートルムに説明を求める。

「想像の通りよあなた！ 今日アートルムが連れてきた子で、私たちの息子になるの……」

そういうながら本当にうれしそうに語るメアリー。

僕は、そう言われてやつと自分を取り戻すと、自己紹介をする。内容は先ほどメアリーにしたものとおんなじだ。

それが終わると、ハリスが抱きついてきた。目元を緩ませ、とても嬉しそうな笑みを浮かべている。反応が全くメアリーと一緒にだ。

「メアリー、屋敷のみんなのあいさつは済ませたのかい？」

そういうて、笑顔のままメアリーの方を見るハリス。

「いいえ、まだよ。あなたが帰つてきてからやうつと思つて……

」

メアリーがそう言つと、さつそく使用人をみんなダイニングに集めた。

使用人のは、メイドさんと執事さんが一人ずつと料理長さんが一人だけらしい。本当は貴族のでもつと人数が多くてもおかしくは無いのだが、メアリーは家事をするのが好きだし、ハリスはこの街の騎士団の副団長をやっており、実力、名声ともに高い。さらに、二人とも豪華な生活は好きではなく、質素な生活が好みのようあまり無駄に豪華で大きな家ではない。よつて、必要なのはこの屋敷を掃除する人と、料理をする人、ハリスの書類仕事を少し手伝える人程度でいいらしいのだ。また、それらの仕事を全員がある程度できるため、足りないところには助けに行き、多いところは人を減らしといった具合でうまく回しているそうな・・・。

そんなわけで、自己紹介をする。僕が昼間來ていたのはもちろん知られていたが、改めて自己紹介すると、使用人の人たちはついにお世話できるお子様ができたとみんなうれしそうにしていた。なんでも、お父さんとお母さんは結婚して四年目になるにもかかわらず、今だ子供ができていなくて子供ができるない体質なんじやないかといふ話だつた。だからそろそろ子供が欲しいと思っていたときに、アートルムから子供を引き取つてもらえないかという話が来たときは飛び上がつて喜んだそうだ。

「フォルティ、お願いがあるんだけど。」

自己紹介が終わつた後、唐突にメアリーが言つた。

「フォルティの本当の姿を見せてくれない?」

そう言つてこちらに微笑みかけた。

僕はその言葉にぎょっとした。その後、がばつという音が付きそうな勢いでアートルムの方を見る。

アートルムはと黙り、まるでぎょっと物忘れしてた、といつような口調で

「ああ、この屋敷のみんなには全部話してあるのですよ。これら家族になるわけですし、隠し事は良くないですからね。」

といった。

その言葉を聞き、脱力したような感じでメアリーの方に向き直る。本当にびっくりしたよ、まったくアートルムも黙ってくれてもいいのに・・・。

「それは別にいいけど、その・・・お母さんたちは僕の本当の姿を知つて嫌つたりしない・・・よね？」

僕は、いや僕たちは人間に嫌われているのを知つている。もし、これから一緒に過ごす皆さんに嫌われたりなんかしたら、そう思つと自然に口調が重くなる。しかし、その言葉に皆は頷いた。

「当たり前よ！それを知つているうえで受け入れたのよ？」

「その通りだ。親子には血のつながりも種族も関係ないんだぞ。」

そういうてくれた。人のぬくもりに触れ、涙が出そうになる。これが家族か・・・。そう思いながらこの屋敷の人たちはみんな良い人みたいで安心する。元より、アートルムが信頼する人たちだ。心

配する必要もなかつたかもしれない。

自分の本当の姿を見せても大丈夫な人たちだと判断すると、覚悟を決める。

「ありがとうお父さん、お母さん。ちょっと待つて。」

そういうて自分の体に意識を移し、体を流れる魔力の流れをつかむ。ずっと発動している魔法を見つけると、それを解きほぐすように解除していく。

「メタモルフォーゼ
ディスペル
人身変化、解除」

そういうながら、魔力を解きほぐすイメージで徐々に魔法を消していく。

僕の体がまばゆい光に包まれ始める。

輝きが収まる、ミッシェル家の人たちはみんな驚嘆の声を上げた。

「かわいいー！！！」

そういうて、メアリーが僕の体毛に体を埋める。

「これはまた、本当にかわいらしいな。」

そう言つてハリスは僕の頭をなでてくれる。くすぐつたいな。

「本当に話に聞いていた通りとは・・・」

使用の人たちも、驚いた声を上げたものの僕の姿を見るとしきりにかわいらしくとか言ってくれる。

今僕の本当の姿は、四足歩行で体はやわらかな小麦色の毛皮に覆われており、ところどころ白色が混じっていて、耳は少しどがり、お尻の部分にはしつぽが生えている。目元はくりつとしていてかわいらしい。

そう、輝きの中から現れた僕の姿は小さな犬だったのだ。

皆の反応を見て、僕は大丈夫そうだと、これから的生活は楽しくなりそうだと安心した。

光の中から現れる僕の姿は・・・（後書き）

感想評価等お待ちしております

最強に導く、犬の師は・・・（前書き）

最初なので、色々な関係整理で忙しいです。

最強に導く、犬の師は・・・

そんなわけで、本来の姿をお披露目した僕は笑顔でミッショル家の人たちに歓迎パーティーをしてもらつた。

人に触れ合い、食事を楽しんだ僕は、これが家族つていうものなのかとしみじみ思った。そしてこれから家族になる人たちがいい人ばかりのようで、これから先の生活がとても楽しみになつた。

パーティーの最中にはいろいろなことが聞けた。お父さんは騎士団に入つており、副団長であるということ。お母さんは普通の貴族令嬢であつたらしかつたのだが、とてもお転婆で周りの人々に迷惑を掛けまくつていたこと。お父さんとお母さんは若いころにお母さんが魔獣に襲われているところを助けたことがあり、その縁で仲良くなつたこと。

そういう話をしていくうちに、「そう言えばあの時は若かつたなあ」「あなたもね、うふふ」といった具合で一人の世界に入つてしまつた。仕方がないので、使用人の人たちと話をすることにした。まずは執事のマニユエルさんと話をしよう。

「ねえねえマニユエルさん。マニユエルさんは何の仕事をしているの?」

マニユエルさんはお父さんが生まれた時からお世話をしていたらしく、今では四十歳を超えたというくらいの年齢で理知的な眼鏡と切れ長な目から厳格で賢そうなイメージがある。しかし、僕と話すときの彼は、目線を僕と合わせ、厳格なイメージの田元を緩ませ話してくれるので別人のようを感じられる。

「呼び捨てで結構でございますよ、フォルティ様。私は、旦那様の政務の手伝いと、旦那さまが不在の時の書類仕事を担当しております。」

そういうて、一礼をする。右手を胸の前にあて、ピシッと伸びた背筋でしゃがんだ状態ながらも腰から上体を少し曲げてお辞儀をする一連の動作は洗練されていて、見ていのこつちまで畏まりそうなつてしまつ。

「ちよつとマーニュアルさんは、呼び捨てにはできないよ。」

ちよつて僕は苦笑する。そして僕は一番気になつていたことを声を潜めて聞いた。

「あのさ、マーニュアルさん。お父さんとマーニュエルさんでじつちが強いの？」

先ほどから気になつていたのだ。騎士団副団長を務めるお父さんは、ぱつと見て魔力量も多く、先ほど聞いた話だと名前も高い。しかし、だ。

「お気づきになられますか。さすがはフォルティ様です。」

そう言つて、先ほどの笑顔を真剣な表情に変える。そして、マーニュアルさんの魔力が少し溢れてきた。

「これでも旦那様の師匠を務めさせていただっておりましたので、少なくとも旦那さまと同等か、それ以上の技量はござります。」

先ほどから、マニコアルさんの中にお父さん以上の魔力が渦巻いているのに気づいていた。さらに、本来魔力とは、魔力量に応じて無意識に体の外に放出してしまっているのだが（経験談）、マニコエルさんにはそれがほとんど感じられなかつた。これはつまり、無意識に放出する魔力を常時無意識で操れるほど魔力コントロールがうまいということだ。少なくとも並みの使い手ではないだろう。

「やつぱりね。体を包む魔力がほとんどないんだもん、すごい使い手だつてことくらいはすぐわかるよ。でも、それだと逆に怪しいから一般の人くらいには出しておいた方がいいんじゃない？」

「ええ。普段はそうしているのですが、失礼ながらフォルティ様はどれほどの使い手なのかと・・・」

そこまで言われて、やつとマニコアルさんのやろうとしていたことが分かつた。というか、最初から気づけばよかつた。あんなに上手に魔力を操れる人が、あんなにへたくそに魔力を隠すわけがないのに・・・。

「むー。マニコアルさん、僕を試したの！？」

僕は、怒つてゐるふりをして頬を膨らませる。

「申し訳ありません、フォルティ様。アートルム様からすごい遣り手が来ると聞いていたのですから、すこし同じ魔術師として興味をそそられてしましました。御気分を害したのなら、本当に申し訳ありませんでした。」

そう言つて深々と頭を下げるマニコアルさん。初めて、人に申し訳なさそうに頭を下げられて、僕は逆に悪いことをした気分になつてしまつた。

「ねつねえ、マニユアルさん、顔を上げてよ。別に怒つてないし。
」

年配の人が子供である自分に頭を下げていて、オドオドしている僕に、マニコアルさんはやつと顔を上げてくれた。

「そうですか、ありがとうございます。フォルティ様はお優しいのですね。」

マニユアルさんはそういうと、真剣な表情の前の優しい顔に戻つてくれた。本当に人が変わつたみたいだ。

「大げさだなあ、これが普通だよ。そうだ！」

そういうて、僕は悪戯を思いついたよ! うんマリを笑う。

「悪かったと思うなら、僕に武術を教えてよー！」

僕がそう言うと、マーラルさんは驚いたように田を見開き、少し戸惑いながら

「フォルティ様は、戦闘においてかなりの域に達していると聞いていたのですが・・・」

と聞いてきた。

「確かに命にかかる戦闘では自信があるんだけど、剣とか、槍とか人間が使う武器は使ったこともないんだ。人間が闘う時に使う、武術っていうのはかなり強いってアートルムからも聞いていたし。

だから、ここに来たらお父さんは頼もつかと思つてたんだけれど・・・

「

ここに来る前に、アートルムからお父さんは人間の中でも結構な技量にあると聞いていた。でも、ここに来て推定だがお父さん以上の遣り手がいるのであれば、その人に師事した方がいいだろ。お父さんには悪いのかも知れないけど・・・

そうして、マニコアルさんの手をまっすぐ見つめる。

「お父さんはお仕事で忙しかっただし、マニコアルさんの方が強そうでしかもお父さんを鍛えたんだから教えるのも上手そうだし、マニコアルさんに教えてもらおつかなと思つて。」

そのまま、だめ? といつ風な感じで首をかしげて下から見上げる。これをやるとアートルムは少し固まってしまうのだが、必ず首を縦に振ってくれるのだ。もしかしたらマニコアルさんにも効くかもしれない。

マニコアルさんの目が少し細まり、少し時間が経つた。

「判りました。旦那様にお伺いして許可が出たらお引き受けいたしましょう。」

やがて、マニコアルさんはそう言いながら僕の頭に手を載せ撫でながら微笑んでくれた。

これで、武術の師匠は決まった。

最強に導く、犬の師は・・・（後書き）

感想評価等お待ちしております

いれかうの予定（前書き）

開いてください。ありがとうございます。このままお進みください。

これから予定

その後も、一人の世界から帰ってきたお父さんお母さんや他の使人の皆さんと話しながら過ごした。

初めてパーティーを開いてもらい、みんなの勢いに呑まれつついつも楽しいひと時が過ごせた。アートルムはしばらくこの家にとどまって街を案内してくれたり、一般常識を教えてくれるらしい。そんなわけで、初めてづくりであった僕は案内された自分の部屋に戻るとすぐに眠ってしまった。

田が覚める。何時も通り、眼はすつきりしている。東側に面している窓の外を見てみると、まだ真っ暗だった。朝食まであと二時（一日は二十時）くらいだろうか。僕は、昔からの癖で睡眠時間はピタリ二時となっている。

この家が建っている場所は貴族街といつところで、この王都『アルサレム』の中、街の西側にある貴族たちが住んでいる住宅街だ。

この王都は緩やかな丘の上に造られており、一番高いうに王城があつて、そこから東に行くにつれてどんどん緩やかに低くなつていく。王城に近い場所に建つ家ほど高い身分の者が住むのだ。

街の中でも北側には魔術学院、南側には迷宮があり、それら町のすべてを高い城壁で囲われている。この街の門は東側だけで、攻められたときに守りやすいように作られているらしい。（お父さんから昨日聞いた。）そんなわけで、日の出前のこの時間に起きたのにはもちろん理由がある。筆筒から、動きやすい服装を取り出して着

替え、黒いフード付きの外套を上に羽織つて窓から外へ出る。

屋根の上に上ると、王都の光景が良く見えた。辺りを見渡すと、人は一人も見られず、街を歩き回っている警備兵もいないようだ。唯一、街の南東の方に明かりが付いているのでそちらに近づかないよう^{ハイド}にすれば万に一つも見つかることは無いだろ。そして僕は自分に認識阻害魔法を掛けた。

そうして、僕は屋根の上を走り始める。屋根から屋根へ、跳び跳ねたり、全力疾走してみたり、たまにバク宙なんかしたりして体を動かす。王都の整えられた街並みが風のように流れていく。そんなわけで王都のいろんな所を探索していると、ようやく朝日が見えてきた。

しかし、ここは本当にすごいと思つ。昼間にはあれだけいた人々が、人っ子一人おらず。あれだけの喧騒が、今ではすっかり静まりかえっているのだ。さらに、これだけ全力で走りまわっていたにもかかわらず、全体の半分も散歩することはできなかつた。

楽しみは明日にとつておくとして、今日はこれくらいにしようと想い、頭から洗浄魔法^{フレッシュ}を使い、汗を消すと窓から中に入つて普通の格好に着替える。

そうして着替えていると、近づいてくる音^{フジ}がする。そして僕の部屋の前に止まるど、ノックが聞こえた。

「フォルティ、起きてる？朝になつたわよ。」

ドアの外からお母さんの声が聞こえた。

「うう。起きてるみたいで、まだから待つてー。」

「あら、もう起きていたのね。せっかくフォルティのかわいい寝顔が見れると思ったの。・・・。」

僕がそつ返事をすると、なぜか落ちした様子で返事をして下に降りて行った。僕の寝顔なんか見て何が面白いんだろう?と首をかしげながら手早く着替えると、下の階に下りた。

ま厨房に行つた。お父さんが起きていた。お母さんはそのまま服を身につけてこちらお父さんとお母さんと一緒に下りた。昨日帰つてきたときと同じ着付をした騎士団

「おはようお父さん。」

「おはようフォルティ。」

そつして、僕に気付いたお父さんが挨拶を返してくれる。

「そうだフォルティ、話があるんだ。昨日マニマーから聞いたんだが、剣を鬻いたいそうだな。」

マニマーとは、マニマーラさんことだ。昨日はお母さんでマニマーといふ。昨日はお母さんで

「うん、僕がここに来た理由の一つだもん。」

「それでだな。アートルムとも話したんだがお前はこりこりなこ

とを知りたいんだろ？」「

その言葉に僕は頷く。

「ならば、お前は十歳から入学できる学校に行つた方がいいと思うんだ。」「

その言葉に僕は胸が高鳴るのを感じた。学校、子供が世の中の様々なことを学ぶ場所。同時に、武術や魔術も学べるし、「友達」と言つものもできるとアートルムは言つていた。

『友達』アートルムが言つには、人間の中で最も美しいものと言つていた。自分たちのようなものにはない考え方。短命な人間たちから学べる数少ない素晴らしいものの一つだと……。

そして、学校と呼ばれるところが一番友達が作りやすく、世の中のことを学べ易く、そしてさまざまな経験ができる場所だということを合わせて言つていた。これを聞いて、僕の願いを叶えてくれる場所だと憧れをもつていたのだ。

「いけるの！？僕、学校に行きたい！－」

僕の剣幕に、お父さんは苦笑しながら諭すように言つた。

「学校に行くと言つても十歳からだ。それに、学校には入学試験というものが合つて、それでどのくらいの頭脳力、武術力、魔術力があるのかを調べられる。そして、その成績によってクラスが決められるんだ。良いクラスに行けばいくほど難しいことを教えてもらえる。つまり、たくさん知りたいことがあるのなら十歳になるまでの間にたくさん勉強して、魔力を上げ、魔法や武術を磨く必要があ

るわけだ。まあ、お前なら魔術や武術に関しては大丈夫だろうが、勉強はする必要があると思うんだ。」

そういうていったん区切り、僕の目を正面から見ながら言つた。

「先ほどの剣術に関するてもそつだし、僕らはフォルに家庭教師をつけようといつ話をしたんだよ。本当は僕がいろいろと教えてやりたいんだけど、仕事でんまり時間がないからね。」

残念そうな顔をするお父さん。でも、すぐに氣を取り直して言った。

「だから、家庭教師に関してはマニューにしてもうひとつにしたよ。マニューは僕の子供のころの家庭教師じきょうで、教え方も上手だし、僕以上の魔術師で、僕以上の剣士だから適任だつ。」

正直、最初に見たときからマニューアルさんと教えてもらえたらいなと思っていたので、剣術だけでなくこの世界の様々なことを教えてもらえるのはとてもうれしい。

「うん。僕もマニューアルさんなら安心だし、この世界のことが学べるならうれしいな。」

いいながらも、頬が上がっていくのがわかる。きっと横から見たらすこくつれしそうな顔をしているんだろう。お父さんも満足そうに頷いた。

「よし、ならマニューアル。家庭教師を頼んだぞ。」

そういうていつの間にか僕の後ろに立っていたマニューアルさんに

言った。

「思いました、旦那様。」

!!!!

ビックリしたあー。まさか後ろに立たれたのに気付かなかつたとは・・・やはり、こういう温かな雰囲気のところに来て安心していただろうか。これから先にも期待が持てるだろう。

でも、それにしたつてすゞいよなあ・・・。

「執事のスキルでござります。」

「何でわかつたの!?」

心の中までお見通しだつたようだ。いやはや凄まじいね。

その後、どのよつやな日程で勉強をするか話し合つた。朝に剣術、午前中はフリーで午後からは魔術の勉強、夜はマナーや言葉づかい、筆記などの勉強といつことになつた。

だが、昨日の今日といつこともありお勉強は明日からといつことになつた。それに、剣術とか人が使う武術は大抵道具が必要で準備がいるから、剣術の練習は準備が出来次第といつことになつた。

今日はお母さんとアートルムが町の案内をしてくれるらしい。今からとても楽しみだ。

「これからのお預定（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

感想評価等お待ちしております。

冒険アドバナー達（前書き）

開いていただいてありがとうございます。

朝食の後、僕はお母さんとアートルムとともに出かけた。緩やかな坂を歩いていく。歩きだしてすぐに、お母さんから、

「ねえフォルティ、手を出して？」

と言われたので、首をかしげながら手を差し出すとお母さんは嬉しそうに僕の手を握り手を振って歩きだした。

「やつぱりいいわね。こうやって、子供と一緒に歩くのが夢だったのよ~。」

本当にうれしそうなお母さんに僕も頬がにんまりしてくるのがわかつた。やつぱり、きれいな人が笑顔だとこっちまで嬉しくなる。

坂を下りて行き、中央広場まで出ると、日が昇つてまだ数刻だといつのに、もう賑わっていた。客を呼び込む声に、店を冷やかしながら歩いている人、男女の組が仲睦まじく歩いているのも見える。

「うわあ、まだ朝なのにもうこんなに人がいるー。」

僕は、一度目にはなるがあまりの人の多さで目が回りしそうになる。一度目などは本当に人の波に酔つてしまつたくらいだ。それくらい人が多い。

「お母さん、あれはなにー？」

「あそこは喫茶店ね。ちょっとした軽食を出したりだと、お茶

を楽しんだりだとする場所よ。ほら、若いカップルがいっぱい
るでしょ？私も若いころはハリストと一緒に……。」

そこから惚氣に入つて言つたお母さんはスルして、アートルム
に対応を任せる。一日にして、もう既にお母さんとお父さんの惚
氣話には耐性が付いていた。

しかし、本当に真新しいものがいつぱいだ。アートルムの住み家
に居たときに期待していた以上にすごい。すべてがキラキラ輝いて
いる、そんな気がする。

「フォルティ、あなたは冒険者に興味があつたのではありません
か？」

アートルムにそう言われ、あつと思ひだす。そうだ、アートルム
と会つ前から楽しみにしていた冒険者ギルドに行かなくては。

「そうだー！冒険者ギルドに行きたいーー！」

はしゃぎながらお母さんにおねだりすると、苦笑しながら

「あそこは荒くれ者がいっぱいいるのよ？まったく、アートルム
も何あんな所を教えたのよ。」

「しそうがないではありませんか。フォルティが一番初めに会つ
た人間は冒険者だったのですから。」

そう言つて肩をすくめる。だが、そんなことは関係ない。あの人
がいた場所なんだから、一度は見ておかないと……。

「ねえねえ！行こうよーー！」

「はいはいわかったわよ。そんなに急がなくとも一緒に行きましょう？フォルティ似合つ服とかアクセサリーとかも買ってあげたいし、武器屋とかにも行ってみたいんじゃないの？」

お母さんの言葉に、僕は胸が高鳴り続ける。どれも話には聞いていたが、実際には見ていないモノばかりでザーツと夢にまで見てきたものばかりだ。

「うん！全部行きたい！！早く行こうよーー！」

「じうじう、あせらないの。時間はいっぱいあるんだから。」

「そうですよフォルティ。あなたはこれからこの王都に住むのですから。」

そう言わても逸る気持ちを抑える術を僕は知らない。焦るなど言われたにもかかわらず、手を引っ張る僕にお母さんとアートルムは苦笑しながらも付いてきてくれた。

そうして、僕は一階建ての大きな建物にやつてきた。大きな木の扉、そこにかかるのは翼を広げ威圧する竜に一本の剣が交差したエンブレム。まるで入るもののが勇気を試しているみたいだと僕は思った。まだ早い時刻だからだろうか？大通りにいた人々の多さに比べると、少しもの淋しさを覚えてしまったくらい人が疎らだ。出入りしているのは厳つい顔をしたゴロツキが半分くらいでこれが夜だから酒場と勘違いしてしまうだろう。

その大きな扉を差し、

「エリックが冒険者ギルドかあ。お母さん、入つてもいいー？」

エリックはお母さんを見つめると、困った顔をして、

「ええと、どうなかしらアートルム。私も初めて入るのだけれど……。」

と言つ。 どうか、お母さんも入つたことは無いのか。横にいるアートルムに向かつてお母さんが聞くと、少し真剣な顔になつて言った。

「そういうえば、エミも来たことはありませんでしたね。私もここにはあまり来ないのですが、ここは荒くれ者が多いです。酒が入つていたり、クエストに失敗して気が立つていたりする冒険者が少なからずいますので、そういう輩には気を付けてください。」

と注意された。 だけど僕は意気揚々といった感じで、高鳴る胸を押さえながらギルドの扉を押した。

冒険者ギルドの中に入ると、意外なことに外以上の喧騒だった。 てつくり出入りする人があまりいないものだから、中もそれほど人がいないんじゃないかと思つていたけど、違つたようだ。

ギルドの中はだだつ広いスペースに、四角い大きな机とベンチのよつに横に広がっている形の椅子、まっすぐ目を向けると右と左にそれぞれカウンターが見える。そしてたくさんの小さな紙が貼つてある掲示板と人の顔が書いてある掲示板、そして二階へと昇る階段。ぐるりと見渡すと田についたのはこれくらいだつた。

しかし、一階にあるその大きな机は半分ほどが埋まつており、朝だというのに酒を飲んでいるものや大声で歌を歌つているものなどはじめて来た者はその迫力に押されるだろう。僕はどうかと言うとちよつと驚いたくらいで、気圧されるなんてことは無く、扉の前でびつくりして道をふさいでいるお母さんを引っ張つて横に寄ると改めて屋内を見渡した。さすがに大声で男の人が歌つているのには吃驚するよね。

「すごい人ねえ。それに厳つい男ばかりじゃなくて女人の人もいるのねえ。」

確かに男の人の数が多いようだけれど、女人たちだけで囲まれたテーブルや、男の人たちのグループと一緒になつて座つている人もいた。だけど、女人だからと言つて決してか弱そうな雰囲気の人はあまり見えず鎧を身につけてる人や剣を脇に置いていて可憐と言つよつは、かつこいい雰囲気の人が多い。まあそれでも全員がかつこいいというわけではなく、隣に杖を立てかけてある人もいるようだから、あの人は魔術師なんだろう。

お母さんも武器や防具をつけたら、こんな風にカッ「よくなるのだろうか？・・・お母さんならありそつだなあ・・・。

と、そんな風に店内を見回していると・・・・・

「おいおい、女とガキがこんなところに何の用だよ。」

お酒を飲んで、顔を赤くして明らかに酔っている人に声を掛けられた。

冒険するモノ達（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
感想評価等お待ちしております。

微笑む悪魔へ 蛇に睨まれた蛙へ（前書き）

開いていただきありがとうございます。

微笑む悪魔へ 蛇に睨まれた蛙へ

「おいおい、女とガキがこんなところに何の用だよ。」

お酒を飲んで、顔を赤くして明らかに酔っている人に声を掛けられた。確かにこの人はさつき大声で歌を歌っていた人じゃないかな？

「「」こは女とお子様の来る場所じゃねえぜえ。ガキは帰つておっぱいでもしゃぶつてな。」

ぎやはははと笑うテーブル。言葉を発した男は僕をバカにする言葉を吐きながら、ふと気付いたようにお母さんとアートルムを見る。

「おいおい「」あ上玉じゃねえか！－－おい坊主、お前はこの女たちを置いてとととお家に帰りな。」

そういうて、いやらしげに田つきで一人を舐めつけるよつて見る。

その二人はと言つと、お母さんは少し怖いのか僕の手をしつかりと握つてくる。心なしか、少し震えていくようだ。

そして、アートルムはと言つと・・・

ものす「」く冷たい目で男の人を見ていた。これはまずい、と僕は思つたが口には出さずに目の前の男の人たちがどうか無事で済まるよう祈祷した。お母さんを怖がらせたんだから、ちよつとくらいい怖い思いをしないといけないしね。

「見たところ、ランクはEと言つたところでしょうか。申し訳ありませんが、今日は酔っ払いに会いに来たわけではないのです。道を開いていただけませんか？」

そういうて、作り笑いを浮かべる。それを見た瞬間、僕の背筋が寒くなつた。手が汗ばんでくる。

アートルムは、僕が青くなるほど怖い。一度怒りだすと、相手が泣くくらいまで苛め続けるくらいだ。そしてそんなアートルムが一番怒つているときの表情は・・・・・・。

だが、何を勘違いしたのかますます下卑た笑みを深くして、冒険者の男の人はアートルムに下品な言葉を投げつける。

「そんなつれない」と言つなよ。いいから宿行こいつぜえ。優しくしてやるからよ。」

そういうながら、手を伸ばした男に對して目をかつと大きく開いたかと思うと、

「いいから早く道を開けると言つてるんです！……！」

そういうて、アートルムの体からとつもない密度の何かが噴き出した。その何かはすべて目の前の男とその仲間に向けられているにもかかわらず、その余波だけで僕の体は動けなくなる。目の前の男はたまたものではないだろう。

思った通り、男は恐怖に目を見開き歯をがちがち鳴らしながら後ろに一步下がる。酒のお陰で赤かった顔も一気に青ざめ、泡を食つ

て氣絶した。男がいたテーブルを見ると、他の仲間も恐怖のあまり氣絶している。

「な、何の騒ぎですか！！」

そこへ、あわてて駆け寄つてくる男の人。今にも襲いかかられそうなドラゴンのエンブレムを胸につけていたのに、眼鏡を掛け、知的なイメージを窺わせる男の人だ。

「なに、そこの冒険者がエミリーに対して不貞を働こうとしたので氣絶させただけです。」

そういうて何でもないことのように微笑みかけるアートルム。先ほどのせつときは嘘のように消え、何時もの優しい雰囲気に戻つている。氣絶している冒険者たちの方は見向きもしないが。

「ア、アートルム様！！？そ、それは失礼いたしました。すぐに職員が片付けますので、奥の部屋にどうぞ。」

そういうて、ギルド員の男の人はアートルムだと分かつた瞬間低姿勢になる。そんなにアートルムは有名なのだろうか・・・？確かにアートルムなら何をやっていても不思議ではないけれども・・・。なにせ、お父さんが聞いたところでは・・・

「フォルティ、要らぬことを考えたらどうなるか分かつていますね？」

ギクッ！？

な、何で判つたんだろう？僕は何も考えていない、考えていない、

うに首肯すると、職員の方に向かって

「いえ、結構ですよ。今日はそちらの用件で来たのではなく、この子にギルドを案内しようとかと思いましてね。」

そう言つて僕の頭をなでる。優しい手つきなのに、心臓をわしづかみされたような感じになるのは何でなんだろう？

「そ、 そうでしたか。 だったら職員を 一人お付けいたしましょ
う
か？」

「そうですか、そうしていただくと助かります。」

まるで何事もなかつたかのようにカウンターに向かうアートルムを、お母さんは茫然とした目で、僕は恐怖に震えた目で見ていた。
それにも、男の人たちも怪我をしないでよかつたよ・・・・・・

そうして僕たちは入口から向かって左側のカウンターに向かつた。先ほどのものすごい殺気に驚いてこっちを見ていた人たちも、ひそひそと小声で話していたが何事もなかつたように元に戻つていた。きっと喧嘩は日常茶飯事なんだろうなあ。

そうしてカウンターにたどり着くと、先ほどの職員の人は空いている職員に向かって、

「おこ、じゅうの方々にこのギルドについて説明してくれ。」

と告げるに相当に怖かったのだろう、僕たちとは田も食わせずに足早に去って言つた。本当にアートルムがどういう位置にいるか気になるね。

「はじめまして、このギルドの受付をしてくるハンナと申します。」

受付に居るお姉さんはとっても美人さんだ。長い髪を頭の後ろでまとめ、真面目そうな瞳でこちらを見つめて軽くお辞儀をしてくれる。

「……寧にあつがとうござります。今日は依頼を受けに来たわけではなくて、この子たちにギルドについて説明してもらいたいのです。」

さつきの殺氣がまるでなかつたかのように微笑みながら、そう言って僕たちを前に出した。

微笑む悪魔へ 蛇に睨まれた蛙へ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想評価等お待ちしております。

やつてせこせこいじる（繪書も）

開いていたおもつがとくにじるこもく

やつてはいけないと

「それでは、基本的なギルドの規則について」説明いたしましたよ
う。まずはこちちらを」覗ください。」

そういうて、カウンターの下から二冊の本を取り出した。お姉さんは僕とお母さんと一緒に置くと説明を続ける。

「これは、このギルドの規則について書かれている本です。本来は新人冒険者向けに配るものなのですが、一応お渡しておきましょ。」

そうして、一つ間をあけると説明を始めた。

「昔のギルドの仕事は、冒険者への魔獣や魔物の退治依頼の斡旋が専門でした。ですが、今となつては何でもする“便利屋”という認識の方が早いかと思われます。」

便利屋、か。僕は冒険者という響きを聞いたときからなんとなくかつこいいイメージを持っていたのだが、そう言わると少し違和感を感じる。

「基本的に冒険者の仕事は大きく“採集”、“討伐”、“探索”、“その他”に分かれます。」

僕が想像していたのは討伐だし、採集もだいたい意味が判るからいいんだけど、他の二つはどんなことをするんだろう？

「一つ目は採集ですね。この仕事は、一般人には行けないところにある薬の原料や鉱石などを持ち帰ることが主な内容になります。すぐ近くの森に生えている薬草から、龍などが住んでいると言われる住処の鉱石など、危険度もピンからキリまであります。」

そつか、採集って言うからかなり簡単なものをイメージしていたけどその採集する場所に危険な魔獣達がいたら危険だもんね。

「二つ目の討伐は、人々の脅威となっている魔獣、魔物の討伐や巣の破壊が主な仕事となります。さらに人間の賞金首を倒すことも討伐に含まれております。」

今出でてきたが、この世界には様々な生き物がいる。まず最初に魔獣と動物の違いだが、簡単に言うと魔力の大きさの違いだ。ほとんどないものが動物で、多いものが魔獣と呼ばれるらしい。

それでは、魔物とは何か。

魔物とは、空気中の魔力が植物や死んだ動物の死体などに集まり、意思を持つた者を総称して言う。厳密に言うと精霊も魔物に含まれるそうなのだが、人間への害意が無いことと、人間よりも高度な知識を持つていて区別して呼ばれているんだって。

だから、魔獣の中で人間に危害を加えないものを聖獣と呼んだりもする。ほんと、人間っていうのはおもしろいと思うよ。

それで、僕が冒険者って聞いて、思い浮かべるのはこの討伐系の仕事だ。僕は冒険者と聞くと、いつも何かと戦っているイメージがあるんだよね。

「三つ目の探索は、人踏未開の地を開き珍しい魔獣の素材や魔石を持ち帰ったり、迷宮の未踏破区の地図の作成などが主な仕事となっております。また作成された地図はギルドで買い取り、冒険者の皆さんへと売るため、他の冒険者の方の危険度を減らす」ことから、かなりの恩赦が支払われることになつております。」

今、話に出て来た迷宮といつものとは何か。

迷宮とは、簡単に言うと魔獣達がたくさんいるところである。と いうより、判つていないうことが多いすぎるのだ。判つていることと言え、世界中の至る所にこの迷宮があり、魔獣達が徘徊していること、それに伴い貴重な宝物や武器防具などが眠つていてること、そして最下層に必ず迷宮を管理している強い力を持つた者がいること。この最下層にいる管理者は一概に魔獣だけとは言えず、靈獣や惡魔、魔物に精靈など強い魔力を持った者達であるといふことが判つて いるのだ。

そんなわけで、だれも行ったことがない迷宮は何があるか判ら ないと言つたことからものすごく危険が大きいそうだ。その分誰もお 宝に手をつけていないらしいから、生きて帰ればものすごい財産に なるのだとか・・・・。

「その他は、簡単に言いますと雑用です。人探しや落し物探しな どの常日頃起じつてることへの対処や、商隊の護衛なども含まれ ております。」

「雑用・・・・・かあ。やつぱりこれが一番冒険者らしくないよね・・・・・。

「これらの依頼はギルドを通じて受け付け、その掲示板に掲載されます。冒険者はこれを見て、気に入った依頼を選びギルドに出すことで受諾し、依頼を遂行することができます。」

さつきは討伐が冒険者のイメージと言つたけれど、探索の仕事は面白そうだ。未開の地に行き、まだ見ぬ強敵と拳を交わす。冒険者になれるのは十五歳になつてからなので、まだまだ先だし人間のことについてもたくさん知りたいことはあるのでどのくらい先になるかはわからないが、いつかは受けでみたいなあ。

「そして、これらの依頼にはランクというものが付けられていて、身の程知らずな依頼が受けられないように制限されているのです。上から順にS～Eまであり、一人前の冒険者と言われるようになるのはCランクからで、現在のギルドの最高ランクの人はAクラスです。Sクラスは幻のランクと言われており、未だ到達した者はいません。」

「誰もいないランクなのにどうしてあるの？」

「そもそも、このランクの付け方と言うのが魔獣や魔物の危険度ランクと同じものを一人で倒せる力量ということになつています。つまり、Sランクの魔獣、魔物を個人で倒せる人がいないということになります。もつともSランクの魔獣、魔物と言うのは魔力が無尽蔵にあり、不老不死に近い存在と言つことなのでどうやっても倒しうるがないと思われますが。」

「理不尽な存在なんだね。」

「そういえば、アートルムはどのランクなの？」

と、お母さんが聞く。確かに僕も気になる話だ。アートルムの魔力量からすると、Aランクくらいだらうか？

「私ですか？私は一応Cランクと言つてはなつてこますよ。」

「え？」

今、Cランクって言つた？ウソでしょ！？どうなつてゐの？？

「私はあまりギルドの依頼は受けていませんので。たまに友人から依頼を受けたりする程度ですよ。」

そ、そうだったのか・・・。それなら納得だね。あのアートルムが一人前程度なんてありえないもん・・・。

「それでは、最後にこのギルドで絶対に破つてはいけないという」とお話しします。」

その今までの雰囲気とは違つピリッとした感じに自然と背筋が伸びる。

「このギルドで破つてはいけないことはたくさんありますが、これだけは守らなくてはいけないというものがあります。」

僕らの目が真剣になつたのを確認して、切り出す。

「それは、幻獣の卵や子供を盗んではいけないことです。」

卵や子供を盗んではいけない？冒険者が絶対に守る約束がそれ？？

「はい。詳しい理由については、なぜか判ってはいないのですがこの決まり」とはギルド創設時、つまり初代ギルドマスターによって定められました。変な決まりに思えるかもしれませんのが、もし破つた場合はギルド強制脱退プラス賞金が賭けられ、地の果てまで追いまわされる羽目になります。あり得ないとは思いますが、絶対に変な気は起こさないようにしてください」

そうして、お姉さんのお話は終わった。なんだかいろいろ隠されていることがあるみたいだけど、将来冒険者になるのかもしれないのだから今日の話はしっかり胸に刻んでおこう。

おひこけないじと（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
感想評価等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1050ba/>

夢見る子犬

2012年1月8日22時49分発行